「新精選古典文法 三訂版」　内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

**東京書籍「新精選古典文法　三訂版」―「精選言語文化」関連表**

※「新精選古典文法　三訂版」の例文（練習問題を含む）のうち、「精選言語文化702」から採録した例文の一覧。

教科書の単元順に、「新精選古典文法　三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。



**１　古文入門**

**児のそら寝**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P41 | 今は昔、比叡の山に児ありけり。 | P106L1 |
| P43 | し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、 | P106L3 |
| P75 | ただ食ひに食ふ音のしければ、 | P107L5 |
| P78 | 寝たるよしにて、いでくるを待ちけるに、 | P106L4 |
| P101 | いま一度起こせかしと思ひ寝に聞けば、 | P107L4 |
| P108 | この児、さだめておどろかさむずらむと待ちゐたるに、 | P106L6 |
| P108 | 「や、な起こし奉りそ。」 | P107L2 |
| P113 | 無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、 | P107L6 |
| P121 | 「幼き人は寝入り給ひにけり。」 | P107L3 |
| P134 | 「幼き人は寝入り給ひにけり。」 | P107L3 |
| P137 | 「いざ、かいもちひせむ。」 | P106L2 |
| P137 | 僧たち笑ふこと限りなし。 | P107L6 |
| P148 | 待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、 | P106L3 |
| P163 | 「や、な起こし奉りそ。」 | P107L2 |
| P166 | 「や、な起こし奉りそ。」 | P107L2 |

**絵仏師良秀**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P113 | 「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きけるものかな。」 | P114L8 |
| P148 | 「かうこそ燃えけれと、心得つるなり。」 | P114L12 |

**大江山の歌**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P155 | 「こはいかに。かかるやうやはある。」 | P116L7 |

**２　随筆**

**徒然草**

［丹波に出雲といふ所あり］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P113 | 「いざ給へ、出雲拝みに。」 | P120L4 |
| P128 | 「ちと承らばや。」 | P121L5 |
| P149 | 「深きゆゑあらん。」 | P121L1 |
| P156 | 「ちと承らばや。」 | P121L5 |
| P158 | 定めて習ひあることに侍ら（　）。 | P121L5 |
| P158 | 「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。」 | P121L1 |
| P185 | 「いざ給へ、出雲拝みに。」 | P120L4 |
| P185 | すゑ直していにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。 | P121L7 |

［ある人、弓射ることを習ふに］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P17 | 「この一矢に定むべしと思へ。」 | P122L3 |
| P29 | 「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。」 | P122L2 |
| P70 | この戒め、万事にわたるべし。 | P122L5 |
| P171 | 「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。」 | P122L2 |

［九月二十日のころ］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P21 | あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。 | P125L1 |
| P34 | かやうのことは、ただ朝夕の心づかひによるべし。 | P125L2 |
| P56 | やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。 | P124L13 |
| P90 | その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。 | P125L3 |
| P112 | ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩くこと侍りしに、 | P124L1 |
| P148 | 明くるまで月見歩くこと侍りしに、 | P124L2 |
| P148 | その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。 | P125L3 |
| P149 | 案内せさせて入り給ひぬ。 | P124L4 |
| P150 | やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。 | P124L13 |
| P160 | その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。 | P125L3 |

［今日はそのことをなさんと思へど］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P100 | 頼みたる方のことは違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりはかなひぬ。 | P126L2 |
| P106 | かねてのあらまし、みな違ひゆくかと思ふに、 | P126L6 |
| P106 | 一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。 | P126L5 |
| P164 | 一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。 | P126L5 |

**方丈記**

［ゆく河の流れ］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P18 | 朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。 | P128L8 |
| P18 | 知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。 | P128L9 |
| P19 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P128L2 |
| P29 | 所も変はらず、人も多かれど、 | P128L7 |
| P29 | 消えずといへども夕べを待つことなし。 | P129L3 |
| P72 | いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。 | P128L7 |
| P76 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P128L2 |
| P76 | あるいは大家滅びて小家となる。 | P128L6 |
| P83 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P128L1 |
| P110 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P128L1 |
| P136 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P128L2 |
| P137 | 消えずといへども夕べを待つことなし。 | P129L3 |
| P137 | 露落ちて花残れり。 | P129L2 |
| P138 | 知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。 | P128L9 |
| P146 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P128L1 |
| P146 | たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、貴き、賤しき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。 | P128L4  ～L10 |
| P146 | あるいは露落ちて花残れり。 | P129L2 |
| P149 | 何によりてか目を喜ばしむる。 | P129L1 |
| P162 | 二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。 | P128L8 |
| P164 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P128L1 |
| P166 | あるいは大家滅びて小家となる。 | P128L6 |

**枕草子**

［五月ばかりなどに山里に歩く］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P146 | 五月ばかりなどに山里に歩く、いとをかし。 | P135L1 |

［春は、あけぼの］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P70 | 春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。 | P79L1 |
| P101 | 火など急ぎおこして、 | P79L8 |
| P109 | 雨など降るもをかし。 | P79L3 |

**３　歌物語**

**伊勢物語**

［芥川］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P19 | 昔、男ありけり。 | P138L1 |
| P40 | 見れば、率て来し女もなし。 | P139L5 |
| P56 | 白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを | P139L7 |
| P59 | 女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。 | P138L1 |
| P76 | 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。 | P138L5 |
| P80 | やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。 | P139L4 |
| P94 | 神さへいといみじう鳴り、 | P138L7 |
| P99 | はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、 | P139L1 |
| P107 | 昔、男ありけり。 | P138L1 |
| P147 | やうやう夜も明けゆくに、（　）ば、率て来し女もなし。 | P139L4 |
| P155 | 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひ（　）。 | P138L5 |
| P155 | 足ずりをして泣けどもかひなし。 | P139L5 |
| P167 | はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、 | P139L1 |

古文学習のしるべ４　和歌の解釈

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P145 | 高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ | P140上L9 |

［東下り］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P21 | 富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。 | P143L1 |
| P42 | 三河国八橋といふ所に至りぬ。 | P141L5 |
| P44 | 道知れる人もなくて惑ひ行きけり。 | P141L4 |
| P45 | 京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。 | P143L10 |
| P73 | 白き鳥の、嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる、 | P143L9 |
| P74 | その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。 | P141L10 |
| P74 | 東の方に住むべき国求めにとて行きけり。 | P141L2 |
| P74 | 「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」 | P143L7 |
| P78 | もとより友とする人、一人、二人して行きけり。 | P141L3 |
| P86 | 橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。 | P141L7 |
| P91 | 渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、 | P143L10 |
| P93 | 限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、 | P143L6 |
| P97 | 京に思ふ人なきにしもあらず。 | P143L8 |
| P100 | 限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、 | P143L6 |
| P143 | 唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ | P142L1 |
| P149 | 東の方に住むべき国求めにとて行きけり。 | P141L2 |
| P154 | 武蔵国と下総国との中に、いと大きなる川あり。 | P143L5 |
| P155 | なりは塩尻のやうになむありける。 | P143L4 |
| P156 | 限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、 | P143L6 |
| P158 | 名にし負はばいざ言問はむ都鳥 | P143L12 |
| P159 | 「かかる道は、いかでかいまする。」 | P142L5 |
| P165 | その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。 | P141L10 |
| P167 | 橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。 | P141L7 |
| P169 | 三河国八橋といふ所に至りぬ。 | P141L5 |
| P169 | 京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。 | P143L10 |
| P171 | 道知れる人もなくて惑ひ行きけり。 | P141L4 |

［筒井筒］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P17 | 男はこの女をこそ得めと思ふ。 | P145L2 |
| P52 | 風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ | P146L2 |
| P81 | 君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも | P146L11 |
| P85 | 君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る | P146L14 |
| P90 | この女をこそ得め | P145L2 |
| P93 | 男も女も恥ぢかはしてありけれど、 | P145L2 |
| P100 | 筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに | P145L5 |
| P102 | 風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ | P146L2 |
| P142 | 風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ | P146L2 |
| P147 | 前栽の中に隠れゐて、河内へ（　）顔にて見れば、 | P145L12 |
| P148 | 男も女も恥ぢかはしてありけれど、 | P145L2 |
| P148 | 悪しと思へる気色もなくて、 | P145L11 |
| P152 | 昔、田舎わたらひし（　）人の子ども、井のもとに出でて遊び（　）を、大人になりに（　）ば、男も女も恥ぢかはしてあり（　）ど、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむあり（　）。さて、この隣の男のもとより、かくなむ。 | P145L1  ～L4 |
| P156 | 君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも | P146L11 |

［梓弓］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P40 | わがせしがごとうるはしみせよ | P148L7 |
| P65 | わがせしがごとうるはしみせよ | P148L7 |
| P136 | 「この戸開け給へ。」 | P148L3 |
| P185 | そこにいたづらになりにけり。 | P149L1 |

**４　日記**

**土佐日記**

［馬のはなむけ］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P24 | 船路なれど馬のはなむけす。 | P154L8 |
| P92 | 年ごろよく比べつる人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに夜更けぬ。 | P154L6 |
| P150 | 住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。 | P154L5 |
| P151 | 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。 | P154L1 |
| P154 | 潮海のほとりにてあざれ合へり。 | P154L9 |

［帰京］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P50 | いとはつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。 | P158L5 |
| P73 | 見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや | P159L3 |
| P87 | 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、 | P158L3 |
| P148 | とまれかうまれ、疾く破りてむ。 | P159L4 |
| P149 | 声高にものも言はせず。 | P158L5 |
| P158 | 「あはれ。」とぞ人々言ふ。 | P158L9 |
| P165 | 今宵、「かかること。」と、声高にものも言はせず。 | P158L5 |
| P185 | なほ飽かずやあらむ、またかくなむ。 | P159L2 |
| P187 | とまれかうまれ、疾く破りてむ。 | P159L4 |

**５　和歌**

**万葉集**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P17 | うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば | P164L11 |
| P27 | 紫のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも | P162L4 |
| P102 | 田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ不尽の高嶺に雪は降りける | P163L10 |
| P103 | うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば | P164L11 |
| P126 | 憶良らは今はまからむ子泣くらむ | P164L2 |
| P141 | あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る | P162L2 |

**古今和歌集**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P14 | 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる | P167L2 |
| P24 | 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする | P166L7 |
| P40 | 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし | P166L2 |
| P57 | 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし | P166L2 |
| P87 | 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする | P166L7 |
| P101 | 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを | P168L6 |
| P149 | 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを | P168L6 |
| P152 | 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる | P167L2 |
| P165 | 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし | P166L2 |
| P169 | 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ | P168L6 |
| P171 | 夢と知りせば覚めざらましを | P168L6 |

**新古今和歌集**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P93 | 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ | P170L2 |
| P144 | 心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ | P171L8 |
| P144 | 志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月 | P172L2 |
| P152 | 心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ | P171L8 |

古文学習のしるべ５　和歌の修辞

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P140 | 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば | P175下L3 |

**６　作り物語と軍記物語**

**竹取物語**

［なよたけのかぐや姫］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P6 | 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P184L1 |
| P78 | 「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」 | P184L5 |
| P83 | 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。 | P184L1 |
| P86 | 名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P184L2 |
| P90 | もと光る竹なむ一筋ありける。 | P184L3 |
| P93 | 名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P184L2 |
| P96 | 三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。 | P184L4 |
| P114 | 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。 | P184L1 |
| P120 | 「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」 | P184L5 |
| P151 | 寄りて見るに、筒の中光りたり。 | P184L3 |
| P157 | あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。 | P184L3 |
| P159 | 「子になり給ふべき人なめり。」 | P184L6 |
| P168 | 「竹の中におはするにて、知りぬ。」 | P184L5 |

［天の羽衣］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P11 | 「いざ、かぐや姫、きたなき所に、いかでか久しくおはせむ。」 | P186L11 |
| P27 | 「そこらの年ごろ、そこらの黄金賜ひて、身を変へたるがごとなりにたり。」 | P186L2 |
| P29 | 格子どもも、人はなくして開きぬ。 | P186L12 |
| P70 | 天の羽衣入れり。 | P187L4 |
| P83 | 格子どもも、人はなくして開きぬ。 | P186L12 |
| P121 | かぐや姫、「もの知らぬこと、なのたまひそ。」とて、 | P187L11 |
| P121 | 翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。 | P188L11 |
| P122 | 「きたなき所の物聞こし召したれば、」 | P187L5 |
| P124 | 一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」 | P187L5 |
| P125 | いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。 | P187L12 |
| P135 | 一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」 | P187L5 |
| P155 | きたなき所に、いかでか久しくおはせむ。 | P186L11 |
| P155 | 今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける | P188L6 |
| P156 | 「もの知らぬこと、なのたまひそ。」 | P187L11 |

［富士の山］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P24 | あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ | P190L10 |
| P37 | 駿河国にあなる山の頂に、持てつくべきよし仰せ給ふ。 | P190L12 |
| P54 | 御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。 | P190L13 |
| P88 | 「いづれの山か天に近き。」 | P190L7 |
| P114 | 広げて御覧じて、いとあはれがらせ給ひて、物も聞こし召さず。御遊びなどもなかりけり。 | P190L5 |
| P115 | 「駿河国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る。」 | P190L8 |
| P117 | 大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き。」と問はせ給ふに、 | P190L7 |
| P117 | 中将、人々引き具して帰り参りて、 | P190L4 |
| P126 | 薬の壺に、御文添へて参らす。 | P190L5 |
| P127 | かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。 | P190L4 |
| P146 | あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ | P190L10 |
| P150 | 峰にてすべきやう教へさせ給ふ。 | P190L12 |
| P154 | その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。 | P191L3 |
| P155 | 死なぬ薬も何にかはせむ | P190L10 |
| P159 | 薬の壺に、御文添へて（　）。〈差し上げる〉 | P190L5 |

**平家物語**

［木曽の最期］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P9 | よつぴいてひやうふつと射る。 | P201L10 |
| P37 | 今井が手を取つてのたまひけるは、 | P195L6 |
| P43 | 「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。」 | P200L9 |
| P68 | 兼平も勢田で討ち死につかまつるべう候ひつれども、 | P195L9 |
| P74 | 木曽は長坂を経て丹波路へおもむくとも聞こえけり。 | P194L10 |
| P81 | 「弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最期の時不覚しつれば、長き疵にて候ふなり。」 | P199L13 |
| P81 | 中に取り込め、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。 | P201L4 |
| P90 | 主従五騎にぞなりにける。 | P197L5 |
| P99 | 「あつぱれ、よからう敵がな。最後のいくさして見せ奉らん。」 | P198L4 |
| P123 | 「さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろし召されたるらんぞ。」 | P200L12 |
| P128 | 「しばらく防き矢つかまつらん。」 | P199L4 |
| P130 | 「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。」 | P199L1 |
| P149 | 五騎がうちまで巴は討たれざりけり。 | P197L6 |
| P149 | 所々で討たれんよりも、 | P199L10 |
| P163 | 鎧よければ裏かかず、 | P201L4 |

［祇園精舎］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P65 | おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。 | P203L1 |
| P75 | 猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。 | P203L2 |

**８　俳諧**

**奥の細道**

［漂泊の思ひ］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P62 | 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。 | P208L1 |
| P75 | 予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、 | P208L5 |
| P93 | 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。 | P208L1 |
| P147 | あけぼのの空朧々として、 | P209L9 |
| P154 | 予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、 | P208L5 |
| P167 | 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。 | P208L1 |

［平泉］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P78 | 衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。 | P211L5 |
| P104 | 三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。 | P211L1～L3 |